令和５年度第３回　市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議　会議録

日　時　　令和６年２月１４日（水）　10：00～11：30

場　所　　姫路市市民会館　５階　第 11 会議室

出席者　　７名　　事務局５名

藤本 真里　座長　　米谷 啓和　委員　　三宅　靖子　委員
大西　麻衣子　委員　　中安　学　委員　　八田　友和　委員
本上　聖子　委員

（事務局）　市民参画部　部長　平石、市民活動推進課　課長　門口 課長
市民活動・ボランティアサポートセンター　所長　岸本、係長　吉田、
主任　得平

次　第

１　開　会

２　議　事

令和６年度ひめじおん講座の内容について

３　その他

４　閉　会

会議の進行記録（要約）

議　事　「令和６年度ひめじおん講座の内容について」

座　長：　地元のまちづくり協議会に参加しようとした際、チラシを見て誰でも参加できるのかどうかためらった経験がある。このひめじおん講座は広域の地域での参加も可能なのか。

事務局：　連携中枢市町の方も参加いただけるように、協定を結ぶ市町には講座のチラシを送っている。実際、神河町や福崎町からの参加もある。

座　長：　対象地域の方が参加できるとわかるように、チラシに記載しておくと初めての人も参加しやすい。

構成員：　センター事業の全体の計画として、講座とひめボラ市とを関連づけるのはどうか。講座の参加者がさらにひめボラ市に関わることで、市民活動に深く関わっていくチャンスがうまれるのではないか。

座　長：　講座の全体のキーワードとして「交流」というようなテーマを設けてはどうか。講座後のランチ会など良い取り組みをされているが、参加者同士、団体同士、講師と団体のように様々な交流がある。ただ仲良くなることを目的にするだけでなく、市民活動に対して意識をもって参加されている方も多いので、そこから「ひめじ de ボランティア」の活動に巻き込んでいくという流れを作ると良いのではないか。

構成員：　活動につなげるという目的があると思うが、この講座を受けてから活動につながった方がどれくらいいるか把握しているか。

事務局：　講座直後のアンケートにおいて、現在活動をされているかの設問はあるが、講座後の活動については把握していない。ただ、傾聴講座の開催後は参加者から活動をしたいと申し出があり、さらに深く学びたいと講師の先生に連絡をとられていたようなので、講座の内容によっては活動につながるケースもあるような印象だ。

構成員：　今後のボランティア活動につながるかどうかという点は、なかなか難しいと思う。例えば傾聴講座は大変人気があるが、参加動機がボランティア活動のためという

よりは自分のためという方が多く、こちらが意図するところに結びつかないことも多い。逆に登録団体を講師に招いて、実際の活動内容を体験してもらうような講座だと、その団体に興味を持つ参加者もあったりする。テーマ決めは難しいと思うが、自分のために参加しても、何かの気づきや活動につながることもあるので、参加しやすい講座があっても良いとは思う。

構成員：　参加者の属性、性別や年齢などを注視してはどうか。学生などを対象にした講座を開催して、その反応を知りたいと思った。

座　長：　先生から促されて参加する学生は多いが、自ら講座を見つけて参加するという生徒は少ない。参加してみると反応も良いのだが、やはり単位に結びつくものとして参加する子が多い印象だ。

構成員：　ボランティアでも、先生からの勧めで参加したけど、意外に面白かったという学生もいるので否定するわけではないが、活動証明書を目的に参加する子が多いと、活動中、前向きにやろうという雰囲気が薄まる印象があるので、単位に結びつけるのは少し抵抗がある。

構成員：　現在、兵庫県立大学と RREP（アールレップ）という地方創生プログラムを進めている。学生に社会との関わりの機会を設けて、受け身でなく自分たちで社会を作っていこうというような人材を育成するプログラムで、参加される方が行政職や NPO などに関心を持つ大学生が多い。少し突飛な意見にはなるが、高校生や大学生に向けてそういったトライアルウィークのような講座があると面白いと思う。

座　長：　RREP は必修科目ではないが、地域に出かけてフィールドワークをしたいとか、コミュニケーション力を高めたいという学生が参加する。なので、まじめで前向きな学生が多い。そういう学生をプロの先生がサポートして、１年間かけて学ぶプログラムだ。今までの神戸商科キャンパスから、姫路に移る予定なので、また紹介したい。

構成員：　感想になるが、講師の選定について団体の PR や資金調達という観点から、登録団体にも依頼しているということであった。現在、社協でも障害福祉の部分で新しい事業を検討している。プロの講師も良いが、障害を持つ当事者に活躍していただきたいという思いもあるので、そういった方が学ぶ機会を設けて、ボランティアの方に当事者から伝えていけるようなそういう流れができればと思った。

構成員：　国際交流関係の団体は、今回「ひめじ de ボランティア」に参加されたのか？

事務局：　「ひめボラ市」の運営サポーターとして参加された方の中には、英語を話せる方やベトナム国籍の方はいたが、「ひめボラ」の体験メニューとしてのエントリーはなかった。

構成員：　講座には、リピーターが多いのか？それとも講座ごとに違う方が参加されているのか。

事務局：　リピーターもあれば、初めて申し込まれる方もある。

構成員：　博物館で講座を開いたとき、リピーターが多く新規の方が広がらないという経験をした。センターのボランティアや講座に参加された方に、継続的に情報発信は行っているのか？

事務局：　講座のチラシに、取得した個人情報はセンター主催の講座や事業の案内などに使用させていただく旨を記載しており、今後案内を送ることも想定しているが、今年度は各講座とも大変応募が多かったので送らなかった。今後も応募状況に応じて発信していきたい。

構成員：　RREP のプログラムの中で、公園や街路樹の剪定などの取り組みがあり、受講する学生の反応が大変良く自発的にその活動のサークルができた。これは、実際に公園の草木の剪定をしてみて、見る目を養い、地域の緑を守り育てていくという取り組みである。また、私が所属する団体では、庭木の剪定講座を城の西公民館で開催すると、多くの参加者が集まる。自分の家の庭のために参加されるが、講座を受講されることで緑を見る目が変わってきて、公園の緑や植栽が他人事ではなくなるというまちづくりの効果がある。こういった講座によって地域の美しい景観を守るという意識が芽生えるので、面白いのではないか。良い講師の方がいるのでご紹介する。

座　長：　RREP では素晴らしい講師がおられて、その講義が興味深いので学生たちが感銘を受けて、公園管理や動画の作成など新たな活動をはじめている。今、全国的に公園をどう管理していくかという課題があり、高齢者に頼るだけでなく管理や活用の仕方などが検討されている。そういった面からも、このまちづくりにつながるような活動は注目されるべきだと思う。

構成員：　公園に限らず、駅前広場などいわゆる公共的な空間をいかに活かすか、自分たちの活動を表現するとか、体験するとか、そういった講座があると素晴らしいと思う。

構成員：　駅前のキャッスルガーデンではボランティアの方が活動されているので、そういった活動に絡めた講座も良いと思う。体験型の講座はテーマが具体的で参加しやすい。例えば、手話や要約筆記などは活動をしたいという問い合わせなどもある。ただ、資料の中で分類されたボランティアを学ぶといった初心者向けの講座は、どんな内容を盛り込むべきかと考えたときに難しいと思う。何か、こういうことを具体的に学べるという打ち出し方が良いのではないかと思う。

事務局：　初心者向けの講座はそれ単独のテーマでは難しいと認識しているので、体験講座と組み合わせるなど、工夫したいと思う。

構成員：　最近、ヘルプマークをつけておられる方をよくみかける。外から見ると健常者の方とかわりないが、発達障害をはじめとした、様々な障害のある方もそのマークを付けておられる。バリアフリーが進んでいるとは言え、まだまだ認知度が低いと感じるので、そういう方の特性を知って共存できる社会を学べるような講座があればよいと思う。

座　長：　障害の種類が定かではないが、見た目にはわかりにくい障害の人の立場にたって理解するという講座があった。例えば、軍手をはいて折り紙を折ってみるとか、何かの作業で「時間をかけてやれば良いよ」と声かけをしながらの結果と、急かして作業させた結果の違いを体験することで障害を理解するという内容であった。そういった講座を開催する NPO 法人などに依頼しても良いかもしれない。

構成員：　姫路獨協大学には作業療法学科や理学療法学科などがあるので、土日に大学のプレイルームという社会資源を使って、発達障害の子どもの遊び場として開放している。そこには知覚や嗅覚の過敏などいろいろな特性を持つ子ども達が集まり、学生もボランティアで参加している。また、そこでは「のびのびセミナー」という当事者の親御さんや療育に関わる先生方が企画するセミナーがあり、そういう講座をひめじおん講座でも企画して発達障害などの理解を深めていくと良いのではないか。

座　長：　人が集まるというのも大切だが、人材を掘り起こすようなテーマも大事だ。傾聴などにも関連して、ワークショップのファシリテーターを育成する講座なども良

いと思う。今の大学生は、グループワークに抵抗がないのでファシリテーションなども無理なくやるが、地域の高齢の方はその手法を学んでおられる方は少ない。もちろん、そういった手法を知らなくても、話し合いなどは問題なく進めておられると思うが、そういう手法もあることを知っていただくと、これから増えていくであろう地域での話し合いの場で活用していただけるのではないかと思う。

構成員：　参加の人数が多いということは、確かにニーズがあるということなので重要ではあるとは思うが、掘り起こすような人が集まりにくいテーマというのは、それが根本的な部分で重要なテーマだということもある。分類に縛られることなく、柔軟にテーマを決めていくと良いと思う。

構成員：　学生向けのプログラムの中にローリングストックで防災食をおいしく食べるというような体験型のものがあり、好評だった。能登半島沖地震のこともあり、タイムリーなテーマだと思うので、防災講座をするならそういった内容を絡めるのも良いのではないか。それから、企業がボランティアに参加するような動きはないか。また、企業との連携で何か講座に絡めることはできないか。

事務局：　姫路市社協に、企業ボランティアネットワークがあり活動されている。講座についていうと、包括連携協定で協力してくださる企業にお願いして、防災講座の講師にきていただくなどを検討している。

構成員：　CSR として社会的責任を意識する企業、特に SDG s 宣言をしている企業も増えている。何かしたいと考える企業もあるので、そういったところに投げかけるのも良いのではないか。講座の内容そのものでなくても、企業に案内を送るだけでも良い。災害が起こっても企業経営を継続させていく BCP をテーマにした講座を商工会議所でも開催しているので、そういうつながりがあっても良いのではないか。

座　長：　包括連携協定の企業はどういう協力をしてくださるのか。

事務局：　例えば、今回協力依頼をする予定の企業では、講師派遣や、店舗でのポスター掲示の協力、またイベント時にドリンクの提供などあるので、講座に限らず、「ひめじ de ボランティア」の広報協力も依頼したいと考えている。

構成員：　話が戻るが、発達障害の子ども達へのアプローチというのはしていただきたい。通信制高校に勤務しているが、最近、通信制高校に通う生徒が非常に増えている。

学校の授業内容が簡単すぎるので通信制高校で最小限の通学ですませて大学へ進学する、いわゆる積極的不登校の生徒もいるが、全体の９割程が学校にいけないという生徒だ。不登校になる背景はいろいろとあるが、その中には発達障害や自閉症をもつ子どももいる。ただ、そういう子ども達は 18 歳を超えると途端に必要な支援が受けられなくなる。今まで支援を受けられていた施設でも 18 歳を過ぎると利用できなくなるので、違うところに行ってくれということが多いが、その先の受け入れ施設はほとんどないのが現状だ。そうなると、結局社会に出て、生きづらい中で生活していかざるを得ないということになる。ヘルプマークに対する認知度が低いので、例えばどういう方がヘルプマークをつけているのかとか、どういう接し方が良いのかというような講座があっても良いのではないかと思う。あわせて、こういうテーマになると人が集まりにくいと思うので、満足度ではかるという指標があっても良いのかなと思う。

構成員：　障害をテーマにしたものだと、過去に車いすで街に出ようという講座を開催した。登録団体に講師をしてもらい、イーグレひめじの中で操作のレクチャーを受けた後、商店街や商業施設の中を移動したり、トイレを利用したりという内容だったが、体験型のわかりやすい内容だったので参加者からは好評だった。発達障害などパッとは見えにくい障害をテーマにするとき、どのような内容にするのかはなかなか難しいとは思うが、良いテーマではあると思う。あと、開催する側の立場で見ると、あまりにも参加者が少ないと講師の方に申しわけないなと思っていたが、そのあたりはどうか。

座　長：　今回はこういうテーマで参加者は少ないかもしれないが、深く知っていただくという目的が大事だということを、事前に講師の方とよく話し合っておけば問題ないと思う。例えば、関西万博のプレイベントで兵庫県は淡路島で花博を開催する予定だが、その代表がイベントの開催結果を数で評価するのはやめようと宣言された。量的評価が重要なのではなく、目的や交流や質的な部分に価値を置くような風潮になってきていると感じた。講座の開催もそういった質的な部分を重視することが大切なのではないかと思う。

構成員：　防災講座に絡んで、今まで震災時に発達障害をもつ人は集団の中で適応しにくく人とのコミュニケーションがとりにくく、健常な方よりもさらに避難所生活が苦痛に感じた方も多かったようだ。そのため、危険な療育施設から避難所へ移動できなかったという話を聞いた。防災の観点からも、発達障害の方への理解や認知が深まると、何か起こったときに対応できるのではないかと思う。

構成員：　啓発という言葉が適しているかどうかわからないが、そういった社会全体に周知していくべきという内容であれば、ひめじおん講座よりももっと広い枠組みの、例えば市民講座のような場所で扱う方が良いのではないか。行政だけでなく、例えばロータリークラブでは学習障害などの理解を深めるといった講座を開催しているので、そういうところと共催であったり協力や応援など方法を探って連携するやり方もある。

構成員：　少し話がそれるが、現在、社協では職業訓練センターの障害をお持ちの方で仕事を頑張っておられる方々と何か一緒にできないかということを検討している。皆さんの意見を聞くうちに、社協のスタッフだけで考えるのではなく、当事者の方からの意見を聞きながらともに作り上げたいなと思った。ひめじおん講座についても、講師をお願いする前段階から共に考えることができれば新しい切り口になるのではないかと思った。

構成員：　「はりまいのちの電話」と傾聴講座は連携していないのか。

事務局：　その団体で活動するための研修講座を独自でされているが、ひめじおん講座とは連携していない。センターでお願いしている講師の方は、芦屋市シルバー人材センターから招いている。

構成員：　活動内容として「はりまいのちの電話」と連携すべきかどうかという判断もあるが、姫路でも熱心に活動されている団体なのでつながっていないのは少しもったいない気がした。

座　長：　質的評価についてだが、セミナーの主催者側がアンケートをとるときに、そのアンケート項目を工夫している事例がある。例えば、海の近くでセミナーをし、自然を感じてほしいという目的があった場合には、「潮の匂いを感じたか？」とか、産業振興のために工場があるということを知ってほしいという思いでセミナーをした時には「工場の人と会ったか？」というように、主催者が意図する目的を軸にした設問にする。そうすることで、参加者側も満足度を問われるよりもよほどセミナーの目的がわかるし、楽しく回答できる。すべての講座でということではないが、質的評価を求めるような講座の場合はそういう工夫をしても良いと思う。

構成員：　対象者という目線で言うと、中高年の男性は特に定年になると会社とのつながりとともに、社会とのつながりを失ってしまうことが多いと聞く。一方で自分が培ってきた経験やスキルが活かせるような場があれば喜んで参加してくれるそうだ。

例えば、公園でみんなで使えるテーブルやいすを作るというテーマで講座を開くと、腕に覚えがあるような方が集まる。そういう、具体的で自分のスキルが活きて、かつ社会に役つテーマだと参加される方が多いので、ターゲットを絞った講座が１つあっても良いのではないか。

構成員：　質的な評価は是非やっていただきたい。私も今までいくつか助成金に応募して採択されたが、参加人数が少ないという理由で助成金の返還を迫られたことがある。人数というのはわかりやすい指標ではあるが、利益を追求することが第一ではない行政が主催するなら、質的評価に重きをおいてもよいのではないかと思う。

事務局：　今日の資料には量的評価の部分しか記載していないが、実際のアンケートでは講座での気づきなど感想もお聞きしている。今日いただいたご意見を参考に、今後は設問の仕方ももう少し工夫していきたい。

座　長：　「官能都市」という書籍で、公園がいくつあるかとか駅がいくつあるのかといったような住宅メーカーが唱える都市の評価よりも、飲食店が充実しているとか、まちに活気があるとか、住民目線の魅力ある街についての評価の方が重要だとある。そういった本を参考にアンケートを作っていければと思う。

構成員：　姫路駅前整備のときにその書籍の作者を招いたことがある。イベントの時にどれくらい人が集まるかということも大事だが、それよりもありたい姿をまず描いてそれが実現できたかどうかというのが指標で、それには感性という部分が非常に大事だということに気づかされた。

報　告　「ボランティアデジタルスタンプラリーについて」

構成員：　スタンプラリーに参加する団体募集はこれからか。

事務局：　センターが把握できる活動を対象にするため、夏ボラやひめボラ参加団体に案内したい。

構成員：　ひめじ de ボランティア２０２４のひめボラ市は開催予定か？

事務局：　１１月３日に開催する予定だ。